湖月抄

うすくも

十九

杉氏蔵書

石曜文庫

薄雲

（細）巻名ハ哥を以て号とス　（河）入日さす峯にたなびく
薄雲ハ物思ふ袖に色やまがへる　（花）細ニ雲乃
薄くたなびきたるを物思ひ色ある袖によそへたる也
花とちりしにたへつるにや　（孟）
（細）松風と同年也源氏
三十歳の冬より次年丗一の秋までの事あり

冬になり行まゝに河づらの
すまゐ　（細）大井の里なるゆゑ
（師）川づらハ川のほとり之
（孟）河内本柱の住居とす
不用之　是ハ大井の里也
之
うへの気なる　（細）明石上の心
え明石の旧里をぞ離れ
またく又源をも絶ぐまじき
なれり
つらき所　（細）姫操十ニ
そのかみの所に給ひける女
よいかりけりき。ゆかし
のさふくかくおんなすき
所あれかゝまじへるさがり
おんえ立よくもぬとぞり
それバ所をのへて給ふる。よ
みちびかれだ女宿ぞ
つく給ふもみゝをぞ姫れ
がつゝき所の此わくもの
此は細云前絶是ニ付く
里家をもりこもりてさ
所多かるべしとて明石上
のたいニ二条院に移りて

冬になりゆくまゝに河づらのすまゐいとゞ
心ぼそさまさりてうはのそらなる心ち
のみしつゝあかしくらすを君もなほかくて
はえすぐさじかのちかき所に思ひたちね（細 二条院の東也）
とすゝめ給へど。つらき所おほくこゝろみ（源氏の詞之）
はてんものこりなき心ちすべきをいかに
いひてかなどいふやうにおもひみだれたり。
さらバこの若君をかくてのみハびんなき（源詞之）（明石の姫君之）
ことなり。おもふこゝろあれバかたじけなし（細 中宮の事をゆかしき所あれども）
たいにきゝおきてつねにゆかしがるを（細 紫上之）
しばしみならはさせてはかまぎのことなど
も人しれぬさまならずしなさんとなん

を源の御ごさ海まかれくよし給てごのんくえ
いかにいひてか　細　堀江の坂さへ人のつらきいつまでひとりねともかくべき　拾遺一　師ふや
これよりいひたれさうといふ引哥のかれやうなくく
志りえさうさせて　細　姫君を二条院へむかへて紫上にあづけさせてとく
えゝ御袴の事　細　一勘大略三歳又五歳以上例勿論花山院ハ九歳とぞ　愚案　勘（カンレイ）思目給也
代袴着ハ明石姫君く女人の勘例なるべし　師　人しれぬさまならずハ紫の上の方へ姫君をわたさ
しまゐらせてうつくしくもてかしづきかくまゝいんにも中宮などにもならせ給ふべき人なれバ紫の上の方の山里
などにて人しれずして袴着あるべきかくなれど又紫の上にハ松風君にも姫君の袴着の事を
にてあるべきにとのふ松風の巻をよくまゐるべきなれバ下つるさもまゐらもんさんなど
ふかくめづらしとおもひさんハ引ゆかしかるゝとなしとはえゝのふとおり
さぞおぼすらん　細　明石上の心
之紫上の書にもよし給ふべ
きるゝ　師　明石心に内を
おもふよくかくんとおひしるす
なれバ
あらためてやんごとなき方
細　紫上の御子にしたまふ也
袖の御腹とするてで人
もりきこえなんと
つくろひがたく　源氏姫君の
ことをつくろひがたくゆかしさ
ひとりふみにつけてとく
ことわりにはあれど　明石の
心をかんどえ給でことわりにハ

思ふとまめやかにかたらひ給ふ。さ思すらん（孟　源の御心よくえし）
と思ひわたることなれば。いとゞむねつぶれ（姫君の事）
ぬ。あらためてやむごとなき方にもて（明石の詞也）（姫君の事也）
なされ給ふ人のもりきかんことは中々にや（姫君をいふ）
つくろひがたく思されんとてはなちがた
く思ひたることわりにはあれど。うしろ（源の詞也）
やすからぬかたにやなどは。なうたがひ給ひそ。

あながちのあつかひ　細　自然躰
うしろやすからぬ　細
母などの方をいつくとは思ひ
給ひそと源の給ふ也
前の斎宮おとなびもの給を
細　紫上八年比御子なき
故に斎宮を世話ありのやう
よし給ふとぞ今紫上ハ廿
四歳斎宮ハ廿三歳也
只なにかりの御子のやうし給之
孟　斎宮ハ賢木ニ十四之歳
も同程なるべし紫ハ少し
うへ給ふよハゆえなりけるさま之
愚案　細流年齢似多本
先（セン）斎宮のことなり
あふいめへハ　細　明石上の
心ハ源の御心ハたぐひなきとざり
の人ハ一人ならぬをとあ
給ふまじく安堵し給しよ
まうれしさを紫上一人にと
め給ハつ外の人にハとゆ
うしくや給之

かしこにはとしへぬれどかゝる人もなきがさう（細　紫上之）（孟　いまさら子もできまじきとて）
ざうしくおぼゆるまゝに前斎宮のおとな（きさいの宮　今）
びものし給ふをだにこそあながちにあつかひ（おあつかひきこゆるさま）
きこゆめればましてかくにくみがたげ
なめるほどをおろかにはみはなつまじき心
ばへになど女君の御ありさまの思ふやう
なることもかたり給ふ。げにいにしへはいかば（明石上の心）
かりのことにさだまり給ふべきにかとつて
にもほのきこえし御心のなごりなくしづ
まり給へるはおぼろけの御すくせにもあら（紫の上の御事を推量也）
ず人の御ありさまもこゝらの御中にすぐれ
給へるにこそはと思ひやられて。

さきだよくさら出くべく人もめ
ざましとおぼすらんやおもん
師さだかよめんとと源
のさひんあらりとてまのま
しめよ云ずて東院なをど
へうろひるいは堂上ずぐ
いめざましくりやおぼさん
とくぞい源の御ちろき前
よぞひさらねどもとめ給
ふおようくそふく
ころ方いとてもうくても
御息所わが身上のことを折
捨て姫君の御ためをと明
石上のことなく
此ハされどもさきの人の御とく
もつねよい　細　姫君之御事
君もつねよい世の御おはりひ
ようそいみずみとそふく
おぼえうるよぐと　孟　姫君
幼少のときより世のことき
しやうんと明石上の分別也
あふくつけくり　細　姫君を
そへていはいの御為と
ともさうんとく

（殿上の男をいふなるべし）うぞすしぬ人のすくびこゝさへきかなしも
みもあくぬめを・さみすがまよさらむぞて人も
めざ御しとおぼしたやあらん・よかり身い
とそもうしてもおほじしと・おひされとを
さ人のはゝを・つねみはゝのゆくろよりて（堂の上也）
あべきよしそあめれ・ざりとすしばぶ（孟　きさきよあらはとの心也）
うらみよぞうれあさう御どしょや・ゆふり光
まことそふみてそ・とすらてしろめさ（姫君をとまでにかくしやりさらでく）
うれんしつゝ・くもすゞさむこまで
いらぐあいくとそべりんおぼめつけて
ひと御さるの御さらかりもあるんみぞさ
御ぐゆりひそずるとみと・身のうさこと（孟　家まで明石のなし）

わらはやみ　抄　無為方之
きんさるしとえこしくて
孟尼君姫君をまだ所し
ていづくるれども此給来
よくそ源しやされけるを
昊見之
母うらしてそ　細　帝雀
院ハ延喜第十一村上天皇ハ
第十四の皇子にて坊に
ませど母方の下腹に依
て位をつぎ給くと源も
更衣腹なるに依て位に
つきまゐらすのあさと也
河　東雀院ハ延喜第十一村
上天皇ハ第十四皇子にて
おりませども此帝皇は
母中宮温子昭宣公女なり
なると西宮兄太臣兼明親
王なとハ第一皇子にて更
もあるとうとも更衣腹之
しゆゑ人臣と成給しん氏
右大納言の御をおもや
に御子の御今一と

きざりなり。あまたのみきどきやかさへ人は（細　帝より女御更衣あまた人也）
て・おぼきさるし・ざらんともは・女（尼君細く）
しめいさりぬべきれど・つるよひ悩あ
ようらべくんことゝそそあ・おさ（源の也）
くねがしくのまふこしぬはあいくしぶさう
らさのそきてきてもさししすりぬて・よ母う
さらしくそ・とうどのれにもさいくよゆゑ（公限公家あるなり）
もあれ・この御心の言乃世よふかるはされあ（源氏の器量天子たるべき人なれどもとも）（臣下となり給ふ也）
里住みしかば母につゝ給いは古大納言の御海
ひとゞそぞ・おかりめて・更衣ぞくと。
いそれにまひしけらめよしてそかきとめ
まいりてう人いみじそうしくべくうしとふを

大臣みこのむすめにて女御后ともなりたまふ人のはじめなりくハ源ハ位につき。おかべきさた
まさ人ハすぐらふづきさ　御つの御みさくれども。御人ハすぐれておなじく
るぐさうしむかひらそをさ。
の所　おはいちいさうらんめ
ごうし。親王大臣みこのむ
すめをおくべきをらさう
人も。其中よ親王みこを
大臣みも腹ちがひにしも示
よ付てかうりの示よ云気
師さうしむかひらとと云へ
源分よさらかや。さうろ
いうもひ親王の女此腹そ
も大臣の腹そも。源分か
養すぬどとり腹と云
ぞすうへもとひ中ともも
のぞらく。依おまさむ乞ひ
うらと云をむかひらら
か参と云らくとおそ其
然ども其例をいふ此示又
主不快あらうや
えひろしうぬゐのあり
本養腹とひとしうやう
よいおかれものとく
まてられいやんとあき

あしんだ。又みこころだ后のほかりごとにて。
すぐれしものとひめがおのれひとりの方にはべらもと（とらり腹の人をさして）
ひがしおやのけりそでうしも。えひらうろ
ぬ物すらず。まてられいやんごと思されらさ
ぐみらるうへのごくめのし給ふにつけてすく
多られおひがん前くよつけて。かやかをひ
とふいそりしづれぬらんこそ。やうて
かくしめされねたみぞおとしよはすれども御（御息上のうたてせんいさんあうんとく）
きの所ども。いそなれらるつとめても。
うれ源山ぐくれかくいろすよのえんかあれん。（語光崇）
ぐまるを嗟しまですてずして給りんあり（源氏を）

おかなる腹みも出来なまいばあざされのべつるく　師みて大臣の女みそも本養腹と云ふより
腹と云ふうれらずふともして今の御の上の腹みどいやんごとなきくの腹みとよいうずおかまく
うらむごとなくあざされあるすんごく姿の上の君よみて御の姫と尼君申さるく
心のうちとも。みも
且へく云ひんりのとは思て
御みさんのうらうそしきき
くうりひろ　師心りこさき
人の心を以てうらるまそて
故よろせるともらう
陰陽師宿曜師みとよ
姫君すとよふふ気
うそん示とおくしひおて　細御息上の
源稼あそりことよせて
の話く
慣らぬさのまう　且御息上
へ源の事のまらくいまのさ
へ姫君をりうしのえとの下
人よ源の乃ろうひろく之
人ひまさ乃よ　細宮男の乃
ひるがれまでふくもいつぐ
そくあうりとゑ良を殺ら
てとめのとく姿くよい
るハ云ひありたるらと

さ海をもうてまへしとぞふさらし此人の（御心こさんで）
心のうちとどとみも物とんをなどす（右）
みも御もうら給ていまうらへしとのさ（表へ姫君のおりて二宮縁く）
いへば。ゆりひよしらりみうら。殿もおもり嗟（細御息を）（源氏よ姫君をおもうて）
しまぐしほどさくんとこうのいとゆきさに。（縁べらんとおすらく）
あわるそもえの給をぞ。おもう御ぞのまさい（師 文とはそ御息えのおうて）
なりよくしの給へ方。ほかりよまかり（御息の色こえ）（文の宿也）
のとくひるさまよすぐ。みかそてたぐふ（姫君を男よしてて）
かひさきもいとかしらくしく覚て給うを。（若君此内のよく）
さらまでそづらは人さらんやとみさ

源の中将く
はかくらせまうて
孟 姫君の二条院へうつり
まし日ハ師日どりまう
とらする日し
いそぎつきたれことを
きこしめし
前君の二条院へうつりたまひ
給ふけるそのとよまうし別
へだてハいとくるしかるべきな
きのそこく
きこえたるやうかりしぬ
細 明石の君かなしきも縁
ゆくこそおもひつらんと
孟 何縁と結びて明石の君
へうつりてかりて明石の
上のおもひはかりを察
よりハ君が心ち悲しみ
くわんとく
かなしきこと思ひやる
今かくわれ給ふとも
明石の君も源の君へ
むかへまゐらせハ又参る
の事を悲しむ事たのしみと

うちとけし（源の君）哀におぼして。日などとらせ給
て志のびやかにさるべき（姫君をまゝこんの目とさへ）こと。しめしのおひさ
せて（明石の）給ふ。はなちきこえんことは
いと哀におぼゆれど（姫君の）君の御ためによかるべき
ことをこそはと（明石の君）念ずれど。めのとをもひ
きわかれなんこと。明くれの物おもはしさ。
つれ〴〵をもうちかたらひて。なぐさめならひ
つるに。いとゞたつきなき事さへとりそ
へ（いかにかはかたくとも）いみじう覚ゆべきことゝ（明石の君）君もなく。めのと
も（めのと）さるべきにや。おぼえぬさまにて見たてまつりそ
めて。としごろの御こゝろばへのわすれがたうこひ
しうおぼゆべく。うちたえきこえ

ことは侍らじ。つゐにはとたのみな
がら。しばしにてもよそ〴〵に。おもひのほか
のまじらひし侍らんも。やすからずも侍
べきかなど。うちなきつゝすぐすほどに。
に。しはすにもなりぬ。雪あられがちに
心ぼそさまさりて（明石の君）。あやしくさま〴〵に
に。物思ふべかりける身かなとうちなげ
きて。常よりもこの君（姫君を）をなでつくろ
ひつゝ見ゐたり。雪かきくらしふりつもる
あした。こしかたゆくすゑのことのこらず
おもひつゞけて。例はことにはしちかなる
いでゐ（出居）などもせぬを。みぎはの氷

まへこともまうしたまう
孟 明石の上に頼しき
入りて年比ハありしも
端ちかきに出ゐなども
此君をおもひかへかへ
らばたのしみありて庭を
ながめ給ふ

やくらさん日
細 行平のすゞり
盃 姫君をとつて行末
のまつを此上のおんあり
あつて
雪 よろしき 細 此上の定
盃 それつうまへとハ文を
そんなりぞうよ雪かう
くつともどうもうろて
あとよびのなくなり
是ハなき 細 雪かうき
吉野の山くとも君なり
よろんとくいつうしの
吉野の山よこのりとも
の方そとの勢くし 盃 あれ
ニ乃吉野の山よこまりさま
そら見んとふ我すくさ
くまとの弟てそしらうか
吸云 雪の下うき いづれハ

まへに雪よみちハきを
くまものく
思ひくるしきことの
細 西皇さ御も花よの此へ
源と給ふとゆれども此海
ふ絵つるハ鳴君の御むろ
へかとぞてむゆつずれ
まらし
人やらねし 盃 此上の
のりもらうくいうひきもそ
んさとハ作章ををハ云
ゆて源もの結ぶきさと
源新よ後悔し 細 いうを
しとももおつききもの
とく
うらくしきやうから
細 今ひろさハ一本女様なる
心へきやうし 師一ちんらね
てよいゆひるバんがろきや
うららんと云ろんぶく
とろよへ 細 なさぞゆろの
人でハなろうしと咄
ふのうろひなどことかう
よのあらんまゝくなりとく

なごりをしくおもひきれぬもののなかよ
よるのあさこそなげかしけれやうごい
しらうきうろでなごりつきさん（何ろ上臈さうもとく）
ところ中もとうしてそれゆくれらうじ
（此上の是非へ）いもゆつなごとうひてそなら
あらん旧まして いつよゆ旧何なすらんとら
うきよはうらなさきそ
（此君細川殿）雪 わかさえ山のたハられど見たるとかよ
へ結ぶぞしてとの結へいめのきさうな
く
（おとさ）ゆまさきよしの山と君めてもん乃
なよ結ぶしめやいとうひすゞさむ 此雷也

らうじくりうのうれいもまゝさ（細 源の舟も涙く）
ふゆのよさむのしとねもとよせむ（細 宮へ御迎ひに参らせ）
ねもらでつれなくひとりやすみぞゆかし
（をとこの此上の嘆きよそれあはれさ）ゆ紙のよそておもひめぐらすひとたえん
とさぞおもくやへおがりきなくとゆづれど
かゞくもさやうすらとぞわくさびへ（おやそ）
もいとう何うげてまくよねまへふせ（細 姫君）
終はゑろうゆはゆすいひうさらおきる人の（源の介）
ちくをそれとゆ見ことの恋よりゆふを
ゆうぐおまでぞの詮めてゆくゆくとめぞ
さうつり何さまゝの心かゆるほどなど
いそぎうかりしその袖よそひやうらん

此春より　細　髪を生すなりかゝるをそのはしめや　孟　おほすとハ生をとく
あまそぎの程　細　あまそぎてさげ尼の髪の如く
よそのものに思ひやらん程　明　心のやみの此姫君をはなちて京へまいらせんの中
いかにおぼつかなからんと源のをしはかりまして心苦しく
うちかへしの給ひあかす
姫君の御事をうちかへしのたまふをいふ
くりかへし宣也　孟　源の程
に宣あかす也　師　案ひ
明かし或説に飽まてと云
何かかく口惜く　少
何かかく　細　明石上の詞也
末遠きふたはのまゝ
しほさつゝく　師　姫君を
紫の上のかたへまいらせ
らせても明石の腹ぞと俗
姓のいやしきと人のおもひあ
などりやうに　源の思そ
すわうらひまう行ゝ字
ゑやさんられしうしんとハ
云すうくる悪ひかくおす
すゝし
えもいひやらず　細　明石
上のえハいひもやらでな
らぎりしが此時ハむすめの

心のやみをしはかり給ふにいと心くるしけれはうちかへしの給ひあかす何かかく口をしき身のほどならずだにもてなし給はゞときこゆる物からねんしあへすうちなくけはひ哀なりひめ君はなに心もなく（東へ源の姫君をむかへ給ふ車也）御車にのらんことをいそぎ給ふ（車よせたる所也）よせたる所に（明）母君みづからいだきていで給へり（姫君の母也）（孟　母君よの）かたことのこゑはいとうつくしうて（まて姫君此のまて）袖をとらへてのり給へとひくもいみじうおぼえて

見られよそのび給ひぬるわざなく、松風巻にいひしまでの給ひし時の
後ハからわろぞやうべし　弄同師　松風の巻よ姫君まとさしおきて立給へるをとさなひのか
ほいなきそわやしう　細　ものひく人ねりまそそかりけれどもゆしてもやもひろと
よおてハおもしとはかなぬとものまなしとめめとしし女君よ御をさなきふくろおもしなりおぼすと云へ
身づからしづきそて　かまふいはまと云ふんのやよと云へし
末とをき　細　行末と後しめらく　孟同　師　かさぬの松ハ姫君よなぞらへて今引別るゝ
いつか此人の世をとるべき　明云
ぞとし
おひそめし　細　松風巻よ
おきし根ぞあさやいかゞ　弄
と尼上のよみしとうけて源
きこえの給へ　花鳥説有
後花　武隈の松ハ二木なる
れバ明石上と紫上の二人
に喩らるべし　紫上の事
におきし根ぶしゆへやい
ぐと尼君のよみしをとる
くさらで根もふかけれ
ばと続きたり　師　或抄乃
後抄は　御方　松より小松を
明石上と姫君とし松に用
ゐ給へり　師　おひそめし根
をふかければとハ姫君と
明石との契ふかければなるに

（明石）末とをき二葉の松にひきわかれいつか木だかきかげをみるべき（細　源の心也おもひいれハかくと云心也）えもいひやらずいみじうなけば（源氏　返歌）さりやあなくるしとおぼして（奥州の名所也）おひそめしねもふかければ武隈の松に小松の千代をならべんのどかにをと（明石上）なぐさめ給ふさることゝは思ひしづむれどえなんたへざりける（此二人姫君の車にのる也）めのと少将とてあてやかなる人ばかりみはかしあまがつやうの物とりて（細　よきの女房どもの車也）のる（ソヘ）ひとくるまによろしきわか人

そのおひさきて紫をとあつかふべきすべしとく明石上いふこゝろうき族をとうべきこし云々を
なぐさめて後すつくわが松風の巻のおさき根まし ゆへやいくしと云須とうけさ
思とえまハ及女べうしぎろ乳ぐし不ぬよまきりめべし
はたらしめまうつ 花皇女の御たゝしをせさるみ事ハ陽明門院よりのるまし 河 叡之不根
男女調度也。尼児（ヱガツ）あまがつハ船のうとのやうしかりあん之 仙源抄 法まけ色素とさきよみかわらくさん之厳
まで因らく
ものうつ人 細 明石上の事
と源の思ひやり給ふ
いはつゝやうらんと
細 是ハ源の思ひまぎらさせ也と 師 明
石上は物をおもひてぞ後世
のつとめをもえんとの義
なるびさうらふどもりふハ
細 こゝろくるしき西のをまま
ひはでとくゝの心ひ
しく
ゆみすりて 細 二条院の西
面なるべし 住まれやう
よきらしつれさもし

などのせて御をくりにまゐらす。みちすが（源ノ心也）
らとまりつる人の心ぐるしさを、いかにつ
みやうらむとおぼす。くらうおはしつき（二条院へ）
て、御車よするより、はなやかにけはひこと（孟 二条院のきら〳〵しきを人々の心にて）
なるを、ゐなかびたる心ちどもは、はしたなく
てやまじらはんと思ひつれど、にしおもてを
ことにしつらはせ給ひて、ちいさき御てう（姫君の御殿の事也）
どども、うつくしげにとゝのへさせ給へり。
めのとのつぼねには、にしのわたどのゝ北

山里のつれ〴〵 細 明石上の事
とおもひやり給ふ 抄 常よりさ
へさびしき山里なるを姫君
ゆづりまゐらせていかゞ
とおぼさるらう 細 待合たる
いふせてりのくお庭しう
ふし 師 こゝろへもしま
やうにかゞやくものゝ
いまそや人の物へき
細 源のふく月くハ紫上給
服ゆくあくハ不もわ
ふまじ此物ゆゑとし 師 明
石上の服まてそ源の御子
なれ何とやらん人のお
もひつきますわり、紫

にあたれるをせさせ給へり。若君（姫君へ）はみち
にてねたまひにけり。いだきおろされて（車より）、なきな
どはし給はず。こなたにて（紫上の方也）御くだものまゐりな
どし給へど、やう〳〵見めぐらして（行さきを見る也）、はゝ君（明石の上）
のみえぬをもとめて、らうたげにうちひ
そみ給へば、めのとめし出て（紫上の御そばにて）、なぐさめまぎ
らはしきこえ給ふ。山里（源の心也）のつれ〴〵ましていかにと
思しやるはいとほしけれど、明暮（あけくれ）思すさま
にかしづきつゝ見給ふは、ものあひたる心ち
し給ふらむ。いかにぞや、人の思ふべききずなき
ことはこのわたりにいでおはせで（紫上の事也）と、
くちおしくおぼさる。しばしは人〴〵もとめて（姫君の事也）なく

との腹なるバさやうのき
むすめうとんぜとさやう
のうちく覚えよからで
あてに多きなのめく

はら御ぶくしまづらわ
ごくゆかしきぐるすハ
細 別に経文もみえざれバ
不断の御読経人へ仰ひ文
北方ろひみどのきく
しきもいつものするれバそ
さみのもらうてそ見あこ
ともにかきさし
北方ろひ　姫君の御さまて
ゆうしませハ様子の御
故それよ無しくさわし
きこゆべし
まりまゐるまらうとでも
細 御姉の姫君よつきさく
まりさら女房のみな人々

すさまじく思しけれど、北の方（業のちかきまゝをさるべく）こよひもとくゆち
しきみざ御すれバらくよりてよくつきむり
びやうぶまつれバいつしらうりてきりのえ（孟 業の子の名）
さらし業しわざとするくいでさわつう
ひりそおそびゆかし給ひてめれどもなをのづ
ゝらゝうつらきらうれよゐり。まうさ
めんざしなさきんの。ちわりそへてまいら給れ（孟 副 乳之弁 乳母子なるべし）
もら御ざいわすよぞらわ。ざし地いい（姫君のちゝ北給く）
そゞことなすけれど。気色ことなり。
北方うひ。御めのあそびのこらして（仰 北様君の様よ気まゝ方よ人なるべし）
ゆうしうき西。まゐるまいらとうとしきさ
ざわけられのくらめしなりけるハあれが

の此入隣なきと見るべし
孟 源氏ハ不断人のお入多ければ
されバ姫君の御様見あれ
大一條と孫因みあるすハ
るすぐさくさきゆひの給つうす
づりそりしとらく
さとき引ゆひまする　細 花
多よそりせり別動の中
也。和抄よありて花鳥別よ
泣ときぞ　弄 一勤名今世無　和 若
存新人 頗 物すせ
（北さるさんハ中納言どさ
はすきさと云物と見さ
るや 河 手繈（タスキ） 日本記 襷（タスキ）
襷（タスキ）
角のとくさり　細 御そよ気服
縁むぞる也 抄 二条院へまさ
しなりる因みさくる怒悔
さてその同ぐ　細 さて打死
こ吹えさく流しなりもの
くらしあまハそのしぐさ
れと候ひるまりく　細
あまごとそり　御君のそり
の言信也　抄 何るすとり出く

ちよめをさゝきさ。さぐひめぐさのさを
さひきゆひまつるひつきぞいりうげ（胸之）
さそひてましまする。ちるをふくつさせ給（孟 もとより弁のきえと）
しまめも男のとこうとうとするげさそへ
そりさそていひしぐ。尾気（わさ）もいてば烟を
うすれど。くめてなしつれまとさうへ（姫君のこと）
うれしかるべき世のなかをとるやうなる
ひきこし給へんとうけゝるこの人でよめを
うらくめて世まるさ多めひをおい
そゞそゞとくらべ給へるまゝゆきとなる（侍従）
らんもいとうれしきと思ひよくもあ（抄 十二月の事なるべし）
れバとしめたらまゝのびてまいりうはい（大弐なり）

とハ姫君へあまりぬの色あひなどハと早下して遥なるまでつきそてまつりける女房どもの
うへ世よるきさけるあひのきぬどもゆくりなりんづひ面白し
給ひきするらん　細　源の心。姫君のきぬまきぬなとおもふべきこと也　盃　姫君とりてま
まことハ様なるとおもハんとく

おぼえて　盃く姫君わ
うちまかせてハ八条とも明
らんのすとさのきハらう
ともくぶるとく

ゆかしき孫のハちら
細　らとゆるかくしき
人ちきるまじるよまり給
人わるべし　晴　年孫乃
乳のすけ也

（ゆふの子の種と）とぢさびしきとまねよおげられのしづき（姫君のこと）
ぐさせさんへあすれせめて。おかくんとものふ
ぐうしられバ（源のく）文などもうえまうすくれら
（細　紫の上）られ。女君もい海くるとよおもひきて系給
もずらりさきんへ（姫君のこと）よつきゆるしおきまつり。
（細　源氏一人也）とし色くりぬ。ちらくるすら空によ。おもふこと
（源氏の心）おきぬれ往いとぐめくるくきぐ（京の御所）さわり
（細　ま賀也）こめらるれよそひよ。まりつとひ給める。
人のゆとるしき限ぞの七日（盃の）おろよへびかる
（車あるべし）どしすみ。ゆ。ちきつれまつりもちやるを

とくべいかうるよ　細　天下を
年の附る色。多くにくりて
ハ紫きこの然ハあつしめ
どよハおらとなきき孫よ
又あらくるとの也。当附
の聖代をとり　盃　是聖
代延喜の上のことくりくし
まさまるし八　細　明石上ハ
孫君し是ハちさき哀よ細
く分も海りつまかく

もうらとあらう年と
今ハわさとたくしてる母
里までしてぬ父の方よ
くりそるなしまりぬく

ハまよともうくらしげよえらり。
つぎくの人もんのつらゆはゆきへこと
りやわくんらへ（西對紫の上也）いわらりよえゆらころ
わひきりし。さんぐしの院乃老のれこく
もみさ海えこのおうしもまるしき
さ海よさふ海人でまうくへのもてき
まじうらけども。らづつひしつさう給
よらるきえるしいこよあすて。（源の心）のどらなら
れいとまのひまるどみは。よとそひあうさ
見るなどちろへどもれうきらとまうたど（花ち紫色）
やうよりざしはえし海つどてぞれらく（延喜の御時とおもひ出し給へ）
ろざ海のゆひくらよこめきそくきらの

へうう　光氏君方の別名也一説にはやまには家司光とありき

もくとちりけり月よこそあらめとおひ
まつおりぐさもぞうちやさしくの
どうよめしまへ（源の方さまの志しけるこゝろ）ばかりつのれにつけさ
てなども（紫上のけうさく）こゝろのほうのさ海よかう
かぢめこてよなうし次もそうしあふて、お
なづりさて色べうはわくねぐ（紫の方とうりなき）かなじご
と人を来りつきまうてべてうど
りことなこてす、ちくきぞれそ家
さうかくめやすさけな給なり、山里（玉鬘より）
のつまくどもうしべ（ゆかしきすと心やうく）かかしやれば、かか
やけうさうしのさんりしさ縮をとぐて、
もうり給とてつゆちらこよらけ（うちつぐさと）

さくらのほそなが
細長の冬の直衣なり
光る君の直衣乃うちきに
萩芳なりとさくらさねを
はりさけての様人の方様わ
かなやうくし
女房よてもろくは
玉源の製米君よりは
まくしきれは紫の人ま
くらく

ふともゝ　玉
外之藤の外
也一よへ戸なり細姫君の
たるひ給すねく
わとゆりきん　　細
の前ゝ催る末　河　様人
比出曽乃不禄止い女之　左久良
末津多乎止万知津久礼
留見天河戸利己宇也曽
与也安春可干利己宇也
曽安也二股己止於己曽安

さうじ給てさく／＼のはなそうよえる
ぬれぞひとさうかねてさうしめさうぞ
きうそてまうり（お岩へいとまえへ）しおあさ海にしめ海なすき
夕日よいとどちてこうつしてよみてあすの女
夫（紫の人）ぞずずしくばこまりとくうきさえ
まふ。姫君もいろけすくれ（源の人）まてねぎみ
すそようかそてもてひらきて給ひぞ
よのふともいぞあひめぐくれ（源の人）べさうと海
つそていとおもれとかがしうち（まくまうーのさ）うく玉
ておすくりえんとくらずうひていぞ給
よまことのくちよ（紫の上のさと）給ひけく中ねのさ（紫の女房へ）
してうつく（紫の人）まふ

春止毛以波女乎千可太仁津万左留世那波安春毛左祢己之也曽於与左安春毛左祢己之也曽与
也　催馬楽桜人是也　師　桜人ハ花人とみゆ　ことしくさ人と云へ一　嶋津田を十町つくる
なりとぞしるや　ハ歌の心の如く
舟とむる　細　桜人よさ紅
とりめとる詞言ニの詞を
うけて源氏を明石上
のこと也　桜人の所
まて出ありし明石上
とをまちてなりて　とう
師　とめまうくもと人の
なくハこそおすともまち
めとく
細　さるひらんと
行てみて
八早く来んと也　明
明石上ハ心やすくとも
あすゆりらんと也　花鳥
云あるとハよく心えて
つまなひとゝ云る也
細　紫上のかひやうから
孟　明石上の心を紫の上
ハりとやる也

紫上
舟とむるをちかた人のなくはこそあすか
（中将の君歟）
へりこんせなとまちみめ　いたうなれて
（源氏の言葉也）
きこゆれはいと匂ひやかにほゝゑみて
源氏
ゆきてみてあすもさねこんなかなかに
（細　姫君事也）
をちかた人は心をくとも　何事ともきゝわか
（紫上也）
でされありく人を上はうつくしと
（明石上事也）
と見給へはをちかた人のめざましさもこ
よなくおぼしゆるされにたり　いかに思
（明石事也）
ひおこすらん我にていみじう恋しかり
ぬべきさまをとうちまもりつゝふところ
（姫君の事）
にいれてうつくしげなる御ちをくゝめ
（姫君也）

なくてみなりくハ
細　紫上の事をみてきこし
すさはしく　孟　紫の上の
はらからハいと女房衆
のよりてるい　師　などいふ也
ものいひさうん　同しくハ
此源氏などゝのへし
やうそうれ也
相離たるまのあたり后
せずなりたらん

きくよのつねのおぼえに
かきまぎれたらばさ
うたひあつくやつとまり也
き　師説明石のうへ
ちうちうざ族よのつね
中ハ人おのこはせうり
みやうのまくひも
わらへきりのあとなと

給ひつゝたはふれゐ給へる御さまみ所おほかり
（大人）
御前なる人々ハなどかおなしくは
（孟　明石上の方也）
いでやなどかたらひあへり　あなたには
のどやかに心ばせあるけはひにすみなし
て家のありさまもやうはなれめづら
（明石の上の様体とかくそ源氏の心也）
しきにみづからのけはひなどは見る
たびごとにやむごとなき人々などにおとる
けぢめこよなからず　かたちようい
あらまほしうねびまさりゆく　たゞよのつねの
おぼえにかきまぎれたらばさるたぐひ
（入道を云）
なくやはと思ふべきを世に似ぬひが
ものなる親のきこえなどこそくるしけれ人

ざりしとおもひなるべきをとゞめけり。こゝろへなきひがことのうちに見さる
やうなる人ゝもをとゞしれ。おほかたはしき人なれば源切なりわりめ
もとのうち給なり
世に細ねひがものなるわやのさてらしおもしろきこれ。人のわざなればさ
そことあべきものをみなどゆかしそ
物語人の物どもはおりしのうへ乃俗姓をいふなりわやの入道乃世かり細ねびが
さのりく近衛の中将をまてく。受領なりなりくおりしのうりくりさて
まりられその手なえしもくなかしなれ。其乃人がらいかやうなり源氏
の大切なりおほしめしおりなひくをさくもおなかくくなかしうね
のそなる。今ゝ花あれりと大臣の孫なれどなまなかへし。師役らくの
こうし嘩細の役ハなれりことなり
嘩細の人のこれでねかとあくべこれわどんぞなしくもゆりかなふおり
しの入道乃ゆをそんそなるう丁北ゆもをあおりしのうへの人此わざ
のんふくあうゝ八此姫君とわうめ方なりしうりもくなるおりしのうへを
なそといなしときかりゆなゞきさなるそとく　細　おりしのうへ乃ゆかりさ
もそとさしなへりとも。あめしなさうりていか孔なゞきのかそなり
物云　此段諸物の註釈と書のまとひでもいゆすゞ為き説しかでれは細より
校を給そ細へし　愚案　嘩細の役をめくんおくかれり。今師役一りまうあ
く給をこのむとなる心まさうふへし
の絵などいさてとあべき物をみなど見てと。
そはりはあるぬわざよのを
きはりはあるぬわざよのをあれバやゝの

乗人のうちの注をまいり
しられゆへなりしらう人
ありのほいもしらみて
ありけれるのそとらう
明日
ゆめ乃まうりれ
細　まことよりゆめれやう
さりいつも皆ひ給之殆空
をも給ひて。引きまに不被
評　箋の絵を給へるら
し給ひうへし　河世の中は
姿のまうりれうき稿うち
まうつてねとそとらへ
ひきをぐりん　盃　青表紙
よいうりもりしとうかで。
角ゝうりもくをいうれ
うくせ六絃乃してえうり給
ぞとぞり。花香るにひきさぐ
しもんとりふを率として
具の字を関之。此時ハ物の
とのおりくろうんで海に
ひきさくんじんとみかろう
蓄之蓄総のんて花ひき
かしらん。なりらんじらん

とうなんたらりもなくもてなしくて。
姿のなかのうちきうしとのさうらな
げれて（源の琴を）さうの琴それわりとひきさして給
わりもてさ衆そのけうりしねも。例のかが
しぞうされいびんとさりてをめなる人（明石の上へ）
だもうりきわうとせさろ。ひでうりのことひ（源氏）
（向ひきんし花ひきて）きをぐりんとみぞさう。わうぞんのれことまで。
こ絵やうまうりあひてかくれ。ていろ（明石上の前へ）
なそうされど。やうまうらとまり給
ふおりくろれいかうれきそぐりのことはい
ぬぞうりいさうしめすときもあうちうき
れ李うつどのなどよかちしかしぞて

とかやもとおりぞハ奥之らんしも因く物のよしのおもむきあらんくし　細　河海蒙求之〳〵説る
奥之行も両白氏　師　孟の説可然
こハうちあすれど　細　源の上臈しきさ侮くおふくふそも称尓（レウジ）ま物かてさかるゆハうけ
生ずとおもハり乗大方なりかなそハ物事のりるべくもうかうむ称尓かなそもなりしゝや
さきゆる秘説　細　ゆるさるへまつらりくゆおもふく　師　極秘極密（セイカジ）るまでまゆるしまきて
やうまちすゝまぎらりてゆゑんとへゆおもひてあらゆれてゆかんもとるまハらぐれかん
ねとかり
又いとさぎやうま　細　さすが
ま宮をはさむべき処と源
のし給之　師　又とさ思む良
おさぐやうかりてものゝま
いゆんしさしあかりなく覚
こしかうやもし
女とかくの心の程　細　源氏
のぞきてつのやうまハし給
ひぐらと見えかりて也　嘆孟同
是代らとおもしと花をさへいゑ
身の程まおさうかうすひて
あぬえぞうるがゝく又早下也
ぬかるに不及るき中将の存理
なり

りつ。いとまゆはゞれ給ふ。ほど又いて
げやうにもしなさすべてのこ侮
まいりてなし給ぬなどこそいはと覚えし
こともいとをかしけれ。女（ゆ子上）ともかくの心の程を
あらかじめてもおぼろとゆかしとかくらの
こといひつくぞ。又いとくひげをすなどう（源のかたまさてまゆん上のさらなるを）
て。ばんをきそよりてしもこしあすくいと（源の孝の宰相）
めやすくぞあらけるゆかりよやんごと
なき所まてざまよかりをしらとけ給（源の）

中くいとめでたれて
細二条院へうつろひなん
するをおもひかまりきこと
まあやりひさうて
わりなく　細　たすさう漏り
あれどうくわざと漏
おもく源志深切なるを
そうり師とけさらむと
いふまゝ身まめ目あ
おやうまさふべしと案
る説なり
あらふもさまそらひら
細伏世をさへかりひまそてつ
やうにてつゝもとし　孟　作其
思ひ稚なく入道の宮され
ど。底しがりて京へさらく
壺依やし
ひねほぶりてるとてもあら又お
りてまうき　紫上へ姫君のさき
らせ給るとをけいぶねつぶれ
又かみ上をそゝあゝぶての侮ハ
あそおしかりぬとさけハ和を
ぞくしきなるへし
忘くしとりうきとし　細　汲仕

ふことすくけさうきされりそてあすとこそと（ゆんの内）
きこれば。ちうさとほどまよぎらひくは中
くいとめでたく。へあれつれなること
だぞあしまゐし。侮さうふくやうまふ（孟）
つまへするこそ。けさらきれたると（入道の宮さへ）
し。おもひさぞいひしぐ。この御心を（源の心）
きそおぼさ侮をゆりるにて。ゆつるなり
らずへいとしつゝむつることを
あり。又おもひまじくられしとおもひこそ（心をつくし）
ゆわくちんありそうの心。ゆすきやと（細　葵上の父）
どうきまぬ。世のそりしおぼしつゝあなれ（孟）
ぞ。ゆ宮やけみそゆるしますげくとも（冷泉院）

の表寺殿し附のうた
所さうさの書よまわし
ろし

みかどハ流しまゐらせへ
冷泉院ハ今十五歳ヲ
なりまゐる也

ちげうなるはかい　細　源の用
なる紙ひも附ふよしをと
くわ院後源の心へ　師　源
ハ内ら道世の心ありしに
太政大臣をせかふていま家
のくろなおれバ源を
辛とうなひすさゆへ口か

しく出させ
のちれるさるすくなをし
孟説仕の返事を源のうく
しゆく
世の中さいかしくて　疫病
のさやるやうべし。又花をま
須弥は数なみしくぞ
ありし又さまさうれとぞ
うつそともや
あまり門ニふもれいよふぐ
なか月日星れ光

河　令曰陰陽寮頭一人掌天文暦数風雲気色。註謂天文者日月五星廿八宿也。暦数者計日月之度数而造暦授時也。気色者風雲之気色。言以五雲之色視其吉凶候十二風気知其妖祥。応和二年七月廿日黒雲気下。条広三尺許起坤亘艮。康保二年正月五日白雲広三尺許経天亘東西。

ゐまそかし御ことどもよ。あやめれしころ
さはざるかしこばかりしてかれしとさ人
おほやけ。源氏のみやうじをいたしくらおかしう。（源氏之）
しろ川殿にしてしゆづりきこえてこそ。（大政大臣ノ政とゆづりてこそ）
いとおもきつとところ御そくしおぼく
をゆるされくやうげさ給ひす。帝（ミカド）ハ流ヲ
しらハおるおゆるれくしらねび
させ給ひて世のまつりごとをしろしめく（源の之）
学問しまずべきふはおもねどともさとり
そのほしろしろきましますべきひともな
きどされよゆづりてかは惜かすかは
御いとられんと御心よ。いとあらず

口おし後のはわざなんどふみにほうみどもを
ひまどまるそかんこまやうまとふうう
ひあうかひ出し給ひぬそのほとし如き
世中さはかしうて疫病やけざ病ままの（疫病之）
れさうしたげくのどかすそでおほ門（佐異なども有るべし）
みをもいよふぐへ日月日星の光をこ
え。雲のくてむまひおりこのこ世の人お
どろくしゆるてみちびくのんだ人文（弘石の勘文之）
どもをまゐるみをおやしう世まるで
あらねきことも出つきりあらむわを（源氏之）
どのこるんはこゝろのうらようつゞえ
しく出りとるてしとおりけり。入ねき（細　癖雲之）

みち〳〵の勘文　陰陽（ヲンヤウ）ノ天文博士（ハカセ）などが天変（ヘン）の礼を勘へて帝へ奏するを勘文と云
あやしう世になべてならぬ　帝の父たる人の臣下としてつかふなどやうのまじれること
勘へ出るや陰陽の術ハいはれざる事なれど正しく前代の御父あらはれ
内のおとゞの心にはゞかりある　孟 源氏ゟ天変をとかく思ひ給ふ
ど陰陽のみちにもみえて　師 主上の御さとりあるべきとそうづの物かたりの段を
もこゝろえよとてかくさしある也

さいの宮春の始よりなやみわたらせ給
て三月（ヤヨヒ）にはいとゞおもくならせ給ひぬれば
み幸（冷泉院之）などあり院（桐壺帝之）に別（わかれ）奉らせ給ひしほ
どはいといはけなくて物ふかくも思され
ざりしをいみじう思しなげきたる御氣
色なれば宮（藤つぼ之）もいとかなしく思しめさる
（孟 冷泉に對しての詞之）ことしはかならずのがるまじき年と思
給へつれど（わざと御祈ひもなかりしゆへ）おどろ〳〵しきこゝちにも侍
らざりつれば命のかぎりしりがほに侍らんも

いよ〳〵のがれがたけれど
此度は御心つきてぞかくされ
がたかるべく之
ことしかるまじく
細 后の御詞之上臈しき称
之容易と命の限を知
がほならんもめでたく
弄花云卅七歳之女乃
つゝしむ身之　孟 ことを
のがるまじきとおもひしもと
祈も功徳のことなどゞも
ことさらにしてハもとの御心
上臈しきさまなれば御感あ
り
ふくのまで　細 此心ゞひ
上臈しく感あり
うつゝ段　細 うらくとし
まことに之　師 ふうの母
しきうく容のやうにう
つくとうつらひのなふ
なり

三十七にぞ　抄 藤壺御年之
細 此年の重厄此物語
よ多し女のつゝしむ
べき年也

人やうたてことしう思はんとはゞ
かりてなんくどくの事などもわざと
れいよりもとりわきてしも侍らず
なりにける参りて心のどかに昔の御物
語もなど思ひ給へながらうつしざま
なるをりすくなく侍りてくちをし
くてすぎ侍りぬることゝいとよはげに
聞え給卅七にぞおはしけるされど
（孟 冷泉へ之）いとわかくさかりにおはしますさまを
おしくかなしと見奉らせ給つゝしませ
（主上の御詞）給ふべき御年なるにはれ〴〵しからで
月ごろ過させ給ふ事をだに（細 主上の御心之称）なげき

御つゝしみとくとも
前よ藤雲の命のまゝり
ちりがけゆるんと人やう
うちこもりしらせけん
まこしの事にひしめきそて上
上の御心え

源氏の中にも　孟 花の御縁
を源乃物語てありん
よられかきことと地よ
きなり

さしさもくせ
細 后の御心の中なり。孟
此文意の人なり　師説
一條院帝の后なり。今文
國母女院なれば実よ者
の御人なり。みなお
らいのふかくてんの除
あくれまりとも人りは
まりてまつるぞとく

御つよはつしこなども。つゐまりを
ことよさきせ給はさりけることとくいとぐう
かかりしめうかでこのごろぞかゞろうさ
て。（石山のこと）いしのことをさせの月ばいつねの
はなやかなるのこうさやさうつかなを。
源氏の中ぐもかくかがやかしらぎ
（細 須磨運筆あるべく）まをれいほどなくうろをきゆのもとれ
しさこしゆけり。（花つかの名）定いとうらうそやう
ちとしうちを労しさを給ぞずはんのう
らまかかりつづらるよ。さうさすとをせろ
さへもなすへなすくらころのなうるよ
おもとものしとも。人よまさりりう男と

うへのみの中なりも
細 源の御かうりを帝なとを
御縁ひぬゑすと然して
御給へし 今冷泉ハ源の若
通ありて 御中のかうす
とさりあかねさもうろめ
さく故せまでの御ひ
ともすべく藤雲の亡
ひけつて
かくばかりかけざ御
まそもうくやんどとあき
細 太政大臣のことぐく
孟 源の心よ殺仕の中ぐ
のうせかひしえあるま
女院のうらそへあるまを
歌ゝつて 師 物かやうざさ
お母とハ禁中の御かあよ
と權殿よのうへよ藤雲
まづのうせかうんハ御歌き
あるべきとぞすて藤雲
の御うすハ人それぬ御歌
き浅くぬとの像く

かゝりしかうへの宮の中にもまうでこと（冷泉院のこと）
のみとしてをかしくぬをさゝすよんくう
しうきすらせのすぞこれのちそうさろ
めてむもかゝれさうこうよかゝりしとう
おぶべきもらし給ひつ。かよくもお月やけ
ぐるさ御よそにもしくめんじるさき人のう
ざりおつでさうし給ふんしまても人まれ（花 女院と帝の御中のこと）
ともそうるけくへまれぬ哀つさ限すく
て。はれりまどしゆほしうくぬくされし（孟 家通のこと）
年比ゆかりしうへさりつゝすびらさへ今一
度聞えきよかゝりぬうかいでう。くゆ月まう（藤雲のゆうらうかで）
れいかうるさは本性のまよなりて。ゆありさ（花つかの御事を）

ろうしみて　細　柑子ハ毒な
きなる病人を食用を
ゆるさく但それまでを
るし只不食をいふなるべ
し　嗜　只へうるきる物を
りとうべし　河　聖武天
皇神亀二年ニ柑子ヲ從唐
國來テ植ニ種子ヲ又本草ニ云
柑子無毒云々仍テ病者
宜食ス歟
院の御ゆへえ　細　右の源ア
頼ゆ也桐壷の御巻云之
花見ハ放佚の道云になよ
よても源氏君の段とろう
あふるよ女院の御心より
日ごろうれしく思給ひ
しるすとかのうよ宮つく
孟同師　源の段と見る
ひかふて冷泉院とし

御みなもざうんさんへびよよひこくまへだちうし犯ぐぞうきふくひてこ御うまさこ丸月ばなやまをまへぶれこうらよ給と（冬の包）こうすひを給のうちと由まを給ちもぞとさ世給（御外の人よ御行ひの労つかりてまへ）つりりのいとびいてうみげどれさせ給御つまこれごろうとたりてぶうゞじ（柑子）などどぞよ入れさを給ちびれするりまてれんぶそのこ承るすうせ給まうろしるすげくへ人ぶ御行う院の（原つ不初之ミゆなえ）御述を玄よられひてぶうらのれしろとつきまうゐのふことをうぼすひ（源の忠信と思ふへく）志う給しと思られど御ふくつけてひ介その心もきことある御をとめしうそ

うみすうつの忠君わさうくねぞうれしくゆかしさるよのみく
なふつけてうも　女院の源の志乃給を申し嬉しくさとらとかるよりつ御そうが
りうしきてんとのを思ひしよつ御よをさうしとすくてこうと今日悟とし
そうろうしも　いうそうか
やうよ源ハ若輩のうちを
歎のふと人もみとがめん
とく　源若つゞの御さすよ
いふの君わう給よ人のえ
とぶめんるうとゆかして
御若源とをてしみ
まふんく
ゆなへうれ　落葉の
むつしうらの御うち給を
今うめしかを申しとく
人くさの世よつあてても
御出界ふても御そうう
しくゆうさ落葉の筋御
えまして御心のうちにお
ぶもうるわれいつく想
しうるへし

えんとの君のどうるよ思ひ給ひうを今すへ義よくらかしくて御のうるのくさまくさす子も君のぐさてきうよれらへと中すや（細　源の意之）里給ひずあさ給さ御いとうびどなどくうしも心うくさ御ふとく人めんとれがしへをとびうしへまうの御わう御をえうこの世よつけくも御そうしをおしき人の様をらよるするわざうねじくけくめさうえんくさるすびらひすくゆぼさろくうと限なしとうく

心よはきみよ　師 今はたゞ心よはくなるの心ちや

ばかしからぬ身ながら　細 源の詞也　師 女院の源の心ざしをよろこびて内の御うしろみをつ

かうまつりたまへとのたまひしをいへるなり

太政大臣の

抄 これもその心ちを源乃

思ひまよはれたる心也

のこりなき心ちなんし侍るとき

こえ給ふに

孟 源の詞也猶此のちのあるべ

き事をわらくしと云へ

しうるさまは或か化き

源也又なを面白き入たる者

の又

ともし火などのきえいるやうにて　河 如煙盡焰滅（法華経）

抄 薄雲の御終焉のさま也

源氏の御心ありて此源氏

よりあはれなく

かしからぬ身ながらも。むかしより御うしろみ

つかうまつるべきことゞも。心のいたるかぎりは

おろかならず思ひ給ふるに。おほきおとゞ

のかくれ給ひぬるをだに。世中こゝろあは

たゞしく思ひ給へらるゝに。又かく（薄雲もかくれ給へば）おはしませ

ば。よろづに心みだれ侍りて。世に（それえとく）

侍らんことものこりなき心ちなんし給

ふと聞え給ふほどに。ともし火などのき（源氏の詞）

えいるやうにてはて給ひぬれば。いふかひ（細 薨去也）

なくかなしきことをおぼしなげく。かしこ

がうけにことよせて

河 豪家（カウカ）有千人徳謂豪家 又

高家（カウケ） 史記注 揭冠子曰 德

万人者謂之俊 德千人者謂之

豪 德百人者謂之英也　細 その身の權威を

振のつぐみをせず勝せ　抄

かうけは權門（ケンモン）などをもいふ

なり

くどくの方とても

細 むかしの御わざをつひやし

給はざる也　孟 功德の方

とても人はよき名役などを

ともかくてもをこなはるゝ

八御（イミカ）をもちて。真

実の御心ざしをもて給

ふ　抄 人のすゝむるによりて

さかひて施入などしたる

をも名利がましくいふなし

こまぬく

つかさかうぶりの事のかれ

まうでさせらるゝして

抄 太上天皇になずらへ給ふ御

封をたまひつれば年官年

（薄雲の行ひとかやいふ　抄 第三にあり）き御身の程と聞ゆる中にも。御心ばへな

どの。世のためにもあまねくあはれにおはし

まして。がうけにことよせて人の

うれへとあることなども。おのづからう

ちまじるを。いさゝかもさやうなる事の

みだれなく。人のつかうまつることをも世

のくるしみとあるべき事をばとゞめ給ふ（抄 諸人の上を憐愍（レンミン）のかたさま也）

くどくの方とても。すゝむるによりたま

ひて。いかめしうめづらしうし給ふ人な

ども。むかしのさかしき世にみなありけるを（抄 先帝かの）

これはさやうなることなく。たゞもとより（[illegible]）

のたからもの。え給ふべきつかさかうぶり（年官也　年爵也）

爵號の限わろうずく又中
宮もその附もあろく師女
御の御わざくりのすぐるよ
てあすもさきせまくてか
のついでにしらるゝ事なし
代のはかなきかな
殿上人なとひとつ色なり
細服衣の事諒闇也 孟 天下
諒闇也 素服を着し
わのえなきとは
細天暦八年母后の崩事は村上御
記に云天暦八年正月四日
母后崩 同四日今朝撤御簾
常御座撤改懸簾 御座ニ
鈍色細布為端 古今深草
ことしばかりは
野べの桜し心あらば
ことしばかりはすみぞめにさけ
人の見とがめ
孟こもりゐ給ひてなげかるゝ
事をおぼして下の心なり
ゆへ也

（御封）みふのもの〻さるべきかぎりして、まことに（おん人云もしと）
心ぶかき事どものかぎりをし（寄進しとせさせ給ふるなり）
をかせ給へれバ、何とわくましき山ぶしなど
まで惜しみきこゆ。をさめ奉るにも世中（何のはかなきことまでもとなり）（葬礼のおさまりし）
ひゞきて、かなしと思はぬ人なし。殿上
人などなべてひとつ色にくろみわたり
て、物のはえなき春の暮なり。二条院
の御前（おまへ）の桜を御覧じても、花のえん（細源の女若菜の巻）
のをりなど思し出づ。ことしばかりはと
ひとりごちて、人の見とがめつべ
けれバ、御念誦堂にこもりゐ給ひて、日
ひとひなきくらし給ふ。夕日はなやか

雲のうすくわたれるがに
び色なると 孟 花のちりし
花紅葉にも心はとゞまら
ましく思はぬりけくし
されど此雲の色のあはれ
おひてかなしきなるが物
哀にて見えて御目のと
まるとの事なるべし
入日さす 細 源氏もと観念
の眼をそへてまず思ふべし
御此歌とりて巻の名と
を又薄雲の女院とも
よせたまへるとし雲
を物と思ひやとのへり
とあり 細
人きかぬ 細 御使の西国九
ありとかひなし所なし
ましき人きかぬ所なれば双地
御 念じ堂まてのこ
されば此歌の時もらさ
とも人きかぬなり
入道の宮の御母后 細 先帝
の后也 薄雲の御母の
事也

にさして、やまぎはのこずゑあらはなる（細 山ぎはの梢）
に、雲のうすくわたれるが、にび色な
るを、なにごとも御目とまらぬころ
なれど、いと物あはれにおぼさる
入日（源氏）さす峰にたなびくうす雲は
物おもふ袖に色やまがへる 人きかぬ
所なれバかひなし。御わざなども過て（孟 四十九日也）
事どもしづまりて、帝もの心ぼそ（冷泉院也）
く思したり。この入道の宮の御母后の御
世よりつたはりて、つぎ〳〵の御いのりの師にて（つぎつぎの）
さぶらひける僧都、故宮にもいとやむ（孟 薄雲の御母后）
ごとなくしたしき物に思したりし（冷泉帝の御祈師也）

御いのりの師にて　孟　薄雲は母后より此僧都の御祈の師となりて薄雲女院も御信仰之
故母后とハ薄雲の御母也薄雲の御母后ハ先帝ノ后也

今ハ終のおこなひ
今ハともや験ざくの行
をやめて後世のつとめを
せんとて籠り居る也

いでたるを
孟　夜居の僧ハ二間に
伺候して御持僧の事
なり

とのさはおぼえおもくて、いかめしき御願どもを（勅願などゝかきこゆ）
おほくたてゝ、世にかしこきひじりなりける
よはひ七十ばかりにて、今は終のおこなひ（僧都の事也）
をせんとてこもりたるが、宮の御ことに（細　薄雲の御事也）
よりていでたるを、うちよりめしあり（冷泉院より也）
てつねにさぶらはせ給。このごろは猶もと（細　僧都詞）
のごとくまいりさぶらふべきよし、おと（僧都の事也）
ゞもすゝめのたまへば、今はよゐなど（源氏も僧都よ仰らるゝ也）（僧都詞也）
いとたへがたくおぼゆれど、仰ごとの
かしこきにより、ふるき心ざしをそへて
とてさぶらふに、しづかなるあかつきに、

こだいに
古めかしき躰也

いと奏しがたくて
孟　源氏ハ冷泉院の実父
なることをしりなくて陛下
としてたゞ人にてまします故しか
めによりて天変も奇
瑞と災殃のしるしみえて
つゞきても逝去あると
僧都も有りてこの事を
冷へ奏しまいらせずハ
あれこれも奏をバかく
そらにせるもやかゞ
されんとやふゆへをもし
うしなく
天眼　花　五眼の一也帝釈梵
王などの照見也　孟　肉眼天眼
恵眼法眼仏眼五眼也
仏も心ぎたなしとや
孟　奏しさしつるハかれども
憚る気色みえし打也

人もちかくさぶらはず、あるハまかでなど
しぬるほどに、こだいにうちしはぶきつゝ
て、世中のことゞも奏し給ふついでに、
いとそうしがたく、かへりてハつみにも（細　僧都の詞也）
やまかりあたらんと思ふ給へはゞかること
おほかれど、しろしめさぬにつみおもく
て、天のまなこおそろしく思ふ給へらるゝ（天眼イ）
ことを、こゝろにむせび侍つゝ、いのちを
はり侍なば、なにのやくかは侍らん。仏も
心ぎたなしとや思しめさんとばかり
そうしさして、えうちいでぬことあり。（冷泉院）
なに事ならん。この世にうらみのこる（冷泉院也）

なが仏も不直に思しめさ
んとく
法師ハひじりといへども
細一注　寛算供奉の事
などを執念し　弁　何
る事とハ定めがたしうろ
事のあるをとがめらる
しや。又おぼされてもさも
あるべし
いはけなかりし時
細　是より主上の御詞之
又よ幼少よりの御時
より心隔てひざれ
しよ。そハ僧都をさす
るすの侍りしとせ
しんごんのふかきみちをだに
孟　真言の秘密の事さへ
伝受あるのよし
られんうさ
只今奏せんとする事の
さぬハうしこ秘さき大
事とかゝるすとわらると

べくやはあらん。法師ハひじりと
いへども。あるまじきよこさまのそねみふ
かく。うたてあるものをと覚て。い（勅答之）
はけなかりしときより。隔て思ふことな
きを。そこにはかく忍びのこされたること（僧都をさして勅定之）
ありけるをなん。つらく思ひぬるとの給は
すれば。あなかしこ。さらに仏のいさめまもり給（細僧都の詞之）
ふしんごむのふかきみちをだにかくしとゞ
むることなくひろめつかうまつり侍り。
まして心にくまあること。なにごとにか
侍らん。これハきしかたゆくさきの大事
と侍ることを。すぎおはしましにし院（細桐つぼ之）

かゝる老法師の身にハさ
とひ　うれへ侍とゑて
法師の身ハ然にかう事
とも何の後悔あらん之
仏天のつげある
細　わざとかやうに申す
し給ふ　孟　表裏の虚言
いあるべうしぞて奏聞ある
べしとこゝろさまゝなり
るべし　孟按　細の御疑ある
ありし　孟亦按へられ
わるゑ　細　容ゑ之主上を
さしてやうくわかり
おられらうすのかいと
奏したまく
このむびめわりてれ
とゞしまるの
御源氏へ隠君の時の事
之やうのまぎれ叔天の
とらめさうし藤壺の
おがし恐れて。冷泉の御所
どもよりさ〇て御付ら
思しゝ。又仰もそれを
申してうくらへて侍部

（細うちとまでく）きさいの宮たゞいま世をまつりごち給
（細源氏之）ふおとゞの御ためすべてかへりてよからぬ
ことにやもりいで侍らん。かゝる老法し（羽林をさしてし之）
の身にハたとひうれへ侍りとも。なにの
くひか侍らん。仏天のつげあるによりてそ
うし侍るなり。わが君はらまれおはしま（細藤壺之　孟源と密通のこと之）
しゝ時より。故宮のふかくおぼし
なげくことありて。御いのりつかうまつ（男女のわかれすあれハ之）
らせ給ふゆへなん侍りし。くはしくは法しの心
にえさとり侍らず。ことのたがひめあり
て。おとゞよこさまのつみにあたり給ひ（源氏之）
し時。いよ〳〵おぢ覚しめして。かさね（藤壺之）

上御所のゐも作られ
しとぞ
院とあるは
冷泉院位ありし所とせし
也冷泉院位おりさせ給ひての所
なるべし
そのうけ給はりし絵をそ
花園代の御門えまでとへ
源氏の院へそえてまゐらせしま
なるべし
源氏をとみ奏し
御ふしるとて御かたちを
逆鱗（げきりん）ありと源恐怖して
院前をまうさん
ともなく

てれいのりどもとうけ給はりし御しとて（源氏の）
ぞとまうしめしてあん文をうるよしく
もへゆかとられてれいのねよつさゆへ
しまくもずでつうまつりこともを給
しそのうけ給はりし絵をそへて
くそうすゐせい（冷泉院之）なうしめすよ（叡覧之）わさまし
うめづくりかてゆそろへうしとおもし
うとふ御くよれうろそずれなりと（盃あるしとえん之）
ぞうれいくをうけまへ源氏をもとへ
うしつうどぞんすくゆずしめとそやと
まゐうつうゆりひて（冷泉院之）やそうりしこゆり
てまゐるとめしとめて（細殿之らく奏しらく）らくはあきて

又此ところをさして
御此御所にて杭ありしやわら
人と皇上の御あれ紫
を御代之
さるよしらせん
御みきうの寝の多きに
仍て弘天の照殿などそう
ことく
天でんきうに
細例よすびからう天変
のうらよみくらり
盃まへの御よ天津宮よ
ともいよぶかる月本
しの交えし雲れてもそ
まひわりとらうすく
いとふそく　盃　幼稚よお
つまりて絵のえもゆるし
なりとかり

もぞうるまじくばはの世までのしらべありわり
べりけるとくきとうかかえのびこあられ
よりけるをとうんべくりてうもろめくゆ
ふたうりとしひぬれば文びとさとりてかり
しつうらあくでひやわりんとのさ御かをそ（源氏御之）
さしれをみあずしと五（ゆげひ）命婦とともに御の
のへごのこの気色もうる給ひしそうるよ
よりあんいてゆそろつう給でてん色ん
あさうりよさとし世中あげりゑすらぬい（御惟也）（不）
ぴけありぬつるなけりのくふあろりめたそ
おぼりつる絵とぞ給つれ。やうくは
とひさうかそしまして、あうよごとをこと

みやの御せより
後る前より先王の
例となしのふみく
云私ともまた歎のなさ
てとで御かく

日ノ御まへにおほせらる由
なるぞ（細 早朝ノ）みなども
し給ふるはみなさびしさ
給へ

まへさをのまべきこれならでとぞとりし
めでたからうのこと。みやの御世より（ゑやうの天暦とく之）
くだまろことそおはすれ。御のつぎとても（孟光傍の心より）
うしめぬがみそろうらまうらそてまへ（外よりもうさじと云ひしと之）
ならでしかくと。なすよらうらうりぎ
し給ぬることなかくりてあり御じくよ。
おけるてめればまでぬらんいゆめれや（孟傍於退記之）（冷泉院御事之）
まいらせることをこうしめて御めくに
先しされさ給故院のはつ給へとう（円融の帝之）
しろめてかぐのくうらんりて世よ（源氏之）（一上八千余らしく位よりかえされ之）
つくさまつと義よくらうげなりまり
ことらでかばしるやこそおとらせ

御らんぜらるようなて
孟おほゆるさきを源の部給
わしくなり内あうをい出給し
て雑文の御ふそうしく

その日式部卿のみこ
細 桃園のみめて紗 権斎院
御父也 孟御記云延長元
年十一月十六日左大臣奏ス
式部卿親王薨ス

いぐさをしかみゆるねはかくみえんとも御給
て。みだしもみだしつるそ給りまつるとは
らんもろよつけてもいとくゞ志のびくく（冷泉の之）（御ろく）
おぼしめされくは御国のうばれさせ給める（猶つぎのみこをおりて国のゆづりうやとく）
をみなことなどの御こととなろしますくれ
がめしろこしろするばなりとこ給り（源の之）
さふその日式部卿のみこうとおひめる
うそうするよ。らよく世の中のさはが（冷泉院之）
しうことをすげさみげしうらうふ
まろすれは御じはくしもえさまうく（源氏之）
給へでつしまふひのふ。えめやるる（冷と源とく之）
御りの御乃つらぐよ。世はつきめるうや（細勅定之世）

天変のさとしさん
細 天変とハ蒼雲也 佐とさりがたくきその緒ん 孟蒼雲あし ませバそれ佐ふとま しまれとく

ひじりのみかど
細 聖代にも怪異あるぞかし 漢家不可勝計也 聖主を戒るなり

もろこしにも侍りける
河 堯湯有洪水大旱之責 高宗成王有雊雉迅風之変 雊雉有小異不失天下之徳 後漢皇后記上 迅風ハ周公旦の時の風 雊雉ハ宗廟の祭ある人のかなへ耳に 物恠とぞ

物のこゝろぼそく例ならぬこゝち
のみなんするあめのしたもかくのどか
ならぬによろづあわたゞしくなん
故宮のおぼさんところによりてこそ世間（よのなか）
のこともおもひはゞかりつれいまは心やすきさ
まにてもすぐさまほしくなんとかた
らひきこえ給ふいとあるまじき御ことなり世
のしづかならぬことハかならずまつりごと
のなほくゆがめるにもよりはべらずさか
しき世にしもなんよからぬことゞもも侍
りけるひじりのみかどの世にもよこさま
のみだれいでくることもろこしにも侍りけ

我くにゝもさなん侍る
河 我朝延喜聖代菅家左遷事以下歟

ましてことわり
細 紫式部大臣式アリ之乃帝光し給てく何迄も皆限りある老死ども也

かたはしまねぶも
細 かやうのことハ女などのまねぶべきことならずと也 草子地なり

つねよりもくろき御よそひ
細 今主上も源も同じ素服なり ませば比まぎれ侍る也

このことをかすめ
御法のことし事をきこえて御子をもし給へり

る我くにゝもさなん侍るましてことわり
のよはひどもの時いたりぬるをおぼし
なげくべきことにも侍らずなどすべ
ておほくのことゞもをきこえ給ふかたはし
まねぶもいとかたはらいたしやつね
よりもくろき御よそひにやつし給へる
御かたちたがふところなし主上も
としごろ御かゞみにもおぼしよることなれ
どきこしめしゝのちハ又こまかに
見奉り給ひつゝことにいとあはれに
おぼしめさるればいかでこのことをかすめ
きこえばやとおぼせどさすがにはしたなく

こゝろしこまりて
細平生ふと仰して慇懃
に源氏むつびかはしま
いらせさぶらはしくおもひ
まうく

今さらに　細　薄雲のよ
くおもひかへしたる
ところによりまさりぬと
同給へさるをもいふぞと
なれぬるなし

うくもおぼしぬべきことあればわがくさ
れうはつましく。みてもえこらい
でなくかなはぬほどにてゆかりさのこ
とゞめをつるもらことよおもうしく
ゆくさを給ひ。らうしとまりあくるさ
御みくいで御気色をはからひ（源氏の事）こ
きんの御ゆめは。おやしときすけり御
へどいひてさぶらう（盃供は志ろめしうとハ源の世まうねえ）くとらへめぐらう
んとはおぼさでつまゐらす人ハ王命婦（冷泉院之　まうぶ）よ
らうしらて。とへ申しうせしめせど。
いふさしふしう思ひ給えんことあり
よなうとの人にもおぼされど（王命婦事）て

いかく御学問
細御学問してハ知ぞされ
こしくせ。凸漢籍勝学者
寸付ク　作　前ふもはさ
えの外と世をまうつこら
給ひんにもそぐゐらせるき
みぐわれバいらくてとく
かうらよハ乱かはれてをと　河秦始皇ハ荘
思ひても
襄王のそしてくして位にはた
くしのべども実ハ始皇
の母太后呂不韋と嫪
毒と云臣下ニ密通し
て平生也　見史記ニ細秦始
皇之事　河海ニみくさり。
いとまうらとふるかに外な
き例あらむし　私ニ　案之晋
元帝ハ牛金と云人の子
也素　鶴林玉露　第五ニ呂ー
秦牛晋　秦始皇ハ呂不
韋が子なりよ仍て呂秦
と云晋元帝ハ實ハ父牛金
なれバ牛晋と云り。然ハ
鶴林玉露にみゆる秦ハ嬴ー

おとゞはいつぞて月のめぐりもひさしくて。（源氏の事）
さまぐ゛もろこしの例をあらはにや（ただ人の子が位につくこと）
としらんしぞ御覧じとぎさうよつゐで
をうけまで。いよゝ御学問をとをさせ（ぞえ）
給ふつゝ書のふみどもをも御らんずる
に。もろこしにはあらはにもしの
びてもみだりがはしきことゝいとおほかり
けり。日本（ひのもと）にはさらにみらんべきところなし
たとひあらんにても。かやうにしのび
たらんことをば。いかでかつたへしるやうの（孟始賜源氏姓人をいふ）
あらんとする。一世の源氏。又納言（あつぞん）大臣より（細云大臣より略）
て。後にさらにみこともなり。位にもつき

氏なれども実父呂氏なれば呂秦とかき晋は司馬氏なれども実父の姓に付て牛晋とし
記たり畧記

ひのもとには　細　呂氏にはなされども一花為陽成院之私以るハ
彼二御子之細説　花　陽成院の御母二条后之業平中将の子を生奉る将軍
給ふことありけり仍て陽成院の帝は中将の子といふ事ありこれもさやうに作り給ふか
又なといへるにや

一世の源氏又納言大臣になりて　細　此例所海にみえたり源を親王になしなるべ
きことあり　抄　是を天子の位にゆづらんとおぼしめさるべし　河一世源氏任官已後即
位例　光仁天皇　元大納言　桓武天皇　元従五位上大学頭中務卿　光孝天皇　元一品式部卿　宇多天皇
貞観十二賜源氏姓任侍従二式部卿是忠親王　元中納言従三位　元慶八四十三賜源姓寛平三十二廿九立親王一太宰帥是
仁和三為親王即帝位　同親王例
貞親王賜源姓任左近中将後為親王中務卿兼明親王　貞元二四為親王元左大臣正一位源氏
上野太守盛明親王　康保四七為親王元源氏大蔵卿正四位下

太政大臣に　細　家めぐるハ
未任給也任槐之のちな
り女悲にみくらり
みかどおぼしよする　細　冷泉のつ
き給ふすぢなり

つき給つるもあまたの例ありけり　孟　源位
人がらのかしこきにことよせてさもやゆ（はつきまふても恥となるべし）
づりきこえましなどよろづにぞ思しける
秋のつかさめしに太政大臣になり給ふべき
ことうちうちにさだめ申給ついでになん
みかどおぼしよするすぢのこともらし（冷泉のく）

おとゞいとまばゆく
抄　源の心中に位のことを思ひ
そしるべくをおそるゝ
ゆゑなり

あまたの御心あくなりて
抄　故院の御心ざしあまた
らんぞれとかくべし

のぼり侍らんといふは
孟　御譲位の事は故ノ御掟ニハヅレタル
てみかやけにまかせいとくし
ての後まつりのすがたを
のぶべき事居してとくる
ひまこもり侍らんとおぼす
と云くの詞よりつゞきを
勅答申さるゝなり

え給けるをおとゞいとまばゆくおそろ
う思して（源の心）さらにあるまじきよしを申かへ
し給故院の御心ざし（是より源の奏し給ふ詞也）あまたのみこ達（たち）の御
中にとりわき（源をさす御心也）て覚しめしながら位（くらゐ）を
ゆづらせ給はんことを覚しめしよらず
なりにけりなにかその御心あらためて
およばぬきはにはのぼり侍らんたゞもと（故院の御掟）
の（のまゝに）御おきてのまゝにおほやけにつかうま
つりて今すこしのよはひかさなり侍
りなばのどかなるおこなひにこもり侍
りなんと思ひ給ふるとつねの御ことのは（冷の御心也）
にかはらずそうし給へばいとくちをし

くらゐそひて
細 従一位の事なるべき歟
牛車ゆるされて
孟 牛車ハ貴人乗之而御門(ミカド)まで牛をかけて入也 輦車(テグルマ)ハ禁中へ参る人ひく也 牛(ウシ)車ハ牛ニ引カスル也 輦車(テグルマ)を乞て後に輦車(テグルマ)とゆるさる之 ウシグルマトヨム之 河 聴二牛車一(ギウシヤヲ) 也 寛弘八年八月左大臣藤原朝臣家牛車出入待賢門上東門ホ云々
するどみとなりおほやけ
孟 源を親王にすべきを と思しめせども天下の政をまつるべき人なきとて 大臣になり給ひて世をまつる 源氏ハ政をもゆづりつる いかやうなるおぼせんとや
花やかにめでたきよ
源の心ゝ御門のさかへ

わしうすんえしりう太政大臣（源氏のこと）になりぬべきさだめあれど、むつかしとゆづりて（細 源の謙辞也）、そのわりて、くじれくらゐそひて牛車（孟 うしぐるま 行 ぎつしや）ゆるされて参りまうでし給ふを、れいどあう（令の心）すまみてまかりまぐさうしと思しの、どうしけうさ物ほとゆりひさえて（日不足ニ物ガタリ之）、世の中のすさまじきにより（細 天下の政務也）、人々、権中納言大納言になりて（細 葵上の兄也 師尹 南家之）、おほやけごとゆづりてんそてのちよにそもろ、ましきゆるまさのいさぎよふ（細 源の心之）、くもおもひはすぐさ海にしぞてめがりもろ。宰相（藤壺之）めでたしそらに古今のけしきなり。

やかせかくるゝどもよ
つゝて山密すをさえ
しゆうあると源の心きは
思うて
きてゝゆきんことと
細 藤壺の御心にあるか
に思ひのありしことをぞさ
しめさむとハえきこえまさ
うしめそでつきてなかり
ゐてつるうつすまりさん
の心にあふをいかがりかざさ
きし
そのまゝとうきそよくし
ゆてゝせのおねがひの歎
きの御礼ならずすれば
主上の御身もつきえぬ

をいと御心ぐるしう見る人のくめがりたまやめると（冷泉之）、こすり給ひをくつげけるさま、されかる（山密ろうとく）こゝとめしくそらしけんと、おやしう心がうち、命婦（細 王命婦之）をくくげどのうゝり（御遁敬）、ころとしりまちつりてぞうし給へり。て参りぬらぬ御かた（源氏命婦する）に對面しまうて、ひさしと（細 源の詞也）りしものつゐでに露ばかりにほのめかし（漏）、らしそうし給ふとや、あやしとおぼして（王命婦詞也）、まへどさしよりげてもえきこえむ人を、とかくし給ふとて、かへりぬめるてなにぞつ（御心の之）とうしとまねひ人の御心かあるまでお、かゞめさげさうしとすこしゆかしかるも。

なりやとおぼしけるおもむき
なりしとぞ
一かなしび心ふかく
細 薄雲のく心深くた
てしまれとこそなる
むて源の忌しく思給へ
秋好女御ハ 細 秋好中宮
之儀より中宮のゆるり
をいつき源のうしろみ給
ふさ御心おぼしかりしも
なきれうしろをすてゝ只ハ
入内あるべきまへの前よみ
うどいをけすくぞろまませ
ばかりみくるしくそひかれ
しまきばかりんとおもひし
ぐぞのよく秋好女御の御
心がらの給べきをたづく
をなろうとこそ
めくまうしう 細 中宮の
さなるべき人にてましませバ
源も後ひ申給く
秋の比二条院に 細 今ハ源氏
と御里のやうにも給へるべしめ
八条院への事しとおかり

（源氏）ひとくかなしび、心ふかくおぼえせしれば給
なげきをすこしやすめさせ給ふ。秋好女
御は、はかばかしくおぼされし御うしろみにて、やん
ごとなき御おぼえなり。御よういありさ
まなども、おもふさまにあらまほしう
みえさせ給へれば、かたじけなきものにもて
かしづききこえまつり、秋のころ二条院
にまかでさせ給へり。しん殿の御しつらひ
いとゞかゞやくばかりしつらひて、（源氏の）いまは
むかしのおやざまにもてなしてあつかひ
きこえ給。秋の雨いとしづかにふりて、御ま
への前栽（せんざい）のいろ〳〵みだれたるつゆのしげ

てうそく人のやうにし給
しとぞ
世中のさわがしきにことつけ
給てやがて精進し給へば
下の心ハ薄雲の忌服之
上の御よそほひやつれ給ふに
ひきのきてしよふとおもふを
けんさしのやうき御
ぜんざいどもこそ
細 源の詞、百草の花のひ
もとくなどの心あり
河 百草の花のひもとく秋
の野におもひたはれん人なと
がめそ
時しりがほ
細 源意の中なるを花ハ
ちりざかりとなる 師 案む
ハ秋ふかくつひえて時あり

さに、（源氏の）いにしへのことゞもかきつゞけおぼし
出られて、御袖をぬれつゝ（細源之）女御の御かた
にわたり給へり。（源の之）こまやかなるにびいろの
なをしすがたにて、世中のさはがし
きなどことつけなして、やがてさう（精）
（進）じんなれば、ずゞひきかくして、さまよく
もてなしたまへる、つきせずなまめかしき
御ありさまにて、みすのうちにいり給ぬ。（秋好の）御几
帳ばかりを隔（へだ）てゝ、（秋好へてすぐそのまへ）みづからきこえ給、前栽
どもこそのこりなくひもとき侍りにけれ。い
とものすさまじきとしなるを、心やりて時
しりがほなるも、あはれにこそとて、（源の新之）そら

かやうまさうとく
ひかしの源氏くも
細 御息所の心ゆくせ
くれぞともや
細 ひとの人への方のかなのとい
とぞもくかくれハ神え参
けりかるかる 小町姉
孟 故御息所あるしと源の氏
をふまけ付てゝ
又なからぬにそ（夫言）
とハ源え来きざかり 細 中来
又つきり給ハざるなり
若八男女の論かるなる
損みしくり
ゑするゝ 細 源のゑま
し方のるげども給り
出給ゝお榮耀（エイヨウ）時代の
おぼしぬるよつがても
をひがすみかりしにゝゝ
ら好色のかに物をひせ
しるまとの事なく

ようりゐまつる夕ぐれいとゞめぞくしきの
ゆくぐも。（秋の巻之）小野の宮にさうまうでゝひ
しめかめのかすどきことしいでまふいと（源のこゝろ）物哀
と覚しうか。（秋宮之）気をゝかれぞとぞやむもと
しうまを給けるひいとらうさげまそう
らうじらきまふ恨ども。おきましくやん
らうよ。おなめきそ（推量之）おもすべからぞ（源のこゝろ）ぬゝら
ぬそくちかしかれと。（御くまかれてゝ）むぬかろつぶる
おぞう（落葉之）そかるや。をそぎ（源の詞之）かりさゝをふ
かすひるすやむべきことりおくて行らぬ
べらし世中かをおもひうろうしきに
ずさしきるまつけて物思ひのうえぞ

さらまづきるすどもの
源氏の男ならへよ好色
のことハこれにらかくね
ふらすひおわりし中に
つかるよ様まそ心もとけ
ぞやさしるのふらんお
るしとゝ
浅ましうのゑ
細 御息所ハつねに源とう
らとにそ給しくとく
かうまでもつかうまつり
孟 御息所のゆかりあれど
中宮をも大切よせのかく
細 やうのあすまでさう
ともえもとし給べき気
とく
かえしもつの 細 つれよい
ひくもろしぬことしや
むもそがれゝをて標を
いふきんゑごきよけよゑか
き発を 晴 むもそがれの
なんとハ御息所の思ひの事
えぞの細とゝかく
今ひかるえの給ひさし

を給きかれさるまじれにしと代の心ぐる
しきが。おもし給しみなかまつるよそる
をしとけども。ひきかくれまてやをめぐと。
かるらん給ふ。すべらひとりえ。此まぐ（細 御息所之）給
おしゆくしよおきましうのをもひつかて
やま給ひ（源の心）しかどすぎし世のそれりをふと
おひのへとれし。さうらすぐもつらす
つりゆらんせくらくみさらんなくさあり
せふまへるをと。かえしからのひとを
せまのひらんハおる（来世の業障まやかるんとふりとりかへ）織いぶきうてそ出おへら
ろれとて。いまひとりものまひしつ。な（細 右近のゑく）
くびをのるまるよ出づる給し給がくでよせ

細 今ひとつハいひさしたる所を申し。藤壺の御事にや 河 時孟月孟 或説云〻 秋好り

らうたけのふるまひにや云〻 師説同

さぐによひきなへし 御物案あらさうらへハ何とも人まかく内くよりかゞえしるまのうき

つゞくるすふとく之

りんげの徳り 細 花散里ゝ。東院よろこびし給るゝさに移て見えしなり。義曰此也。花散里東院へ移りたる事ハ松風のまきにあり

くらゐつかさのぼりけ 御後見して天下の政をとる事などと悦びハいそがず。好色の方にひかれてるゝとの給ふ。秋好へちと懸想（ケサウ）がましく云なさんとての給ふ

おぼろけに 細 おぼろけ すこしく此人の内の事も源氏の後見ふかく侍らがおぼろけなるべきにてハえ出さうらはでならぬ中文とは何物かのあるとといひさしたるをあはれきるすさ

ひ給へし事は、かたはしづゝかなひにたり。ひんがしの院（花散里也）に物する人の、そのかみたよりなく（あまりうきさま程なりしとて）て、心ぐるしうおぼえわたりしも、を（心ばせてよくてとの人に）だしうなりにて侍り。心ばへのにく（孟 花散も源も我ゝひと之）からぬなど、我も人も見給へ明（あき）らめて。（今のとうろくろうすなる之）いとこそさはやかなれ。かくたちかへりおほやけの御うしろみつかうまつるよろこびなどは、さしも心にふかくしまず。かやうなるすきがましき方は、しづめがたうのみ侍るを、おぼろけに思ひしのびたる御うしろみとは。

畊 おもひあへるとハ源氏の下の思ひを云へり 表とするよ 細 おぼろけ あるべきことゝせ

此世のおもひ出にもしつべきふしの侍らねこそ 此世にての思ひ出とする いふかひが口惜き事く 数ならぬをさなき人の 細 明石の姫君也。姫君ハ入内まで待べし。そのほど待遠をかこつべきこととぞ 孟日 師説 数ならぬハ卑下の詞 此門ひろげさせ給（シサイ）て 細 秋好の御幸まで此源氏の一門繁昌すべき時と云〻。やう〻御後見などの

おぼししらせ給ふらんや。あはれとだにの給（秋好之）はせずは。いかにかひなく侍らんとの給へば、うるさうて（宮のおもはれ之）御いらへもなければ。さりや。あ（源の心）な心うとて、（異事之）ことごとにいひまぎらはし（源の心と事にひきかへ給ふ之）給ひつ。今はいかでのどやかにいけるよのかぎり思ふことのこさず、のちの世のつとめも心にまかせてこもりゐなんと思ひ給ふを、この世の思ひ出にしつべきふしの侍らぬこそ、さすがにくちをしう侍りぬべけれ。数（など）ならぬをさなきひ（秋好に頼みまゐらするの心）との侍る。おひさきいとまちどほなりや。かたじけなくとも猶此門ひろげさせ

るゝと言ゆゑ。于公高門の
る　河海にいはく
河伝に于公は東海人其子于定
國字は曼倩家の門乃破
るゝを父老これをつくろふを
于公がいはく少し門をたかく
大にし駟馬高蓋入得るよ
うにすべし。われ獄の司と
してことをさばくに陰徳
多ければかならず我子孫家
をおこすべしと云なり。
かくて定國大臣となり
子永は御史大夫となりぬ。（御史大夫は大納言なりとあるべし）　愚按
幸侍は家の門と同門
と玄里の門のとも父子
と父老と玄里の長也
あらましきこの　お哀く
しきさのゆゑ　孟家は
門ひろがてとの給ふ孫
繁昌すべきよしはすゞう
ちなきてもの給あり
かゝるは春の花のおも
きるよしくおもしと

あひく。給ふぞかならずん源氏もさぞと思ぬ（源の農去の夜おもえ）（明石源氏を思ひ出てまへ）
させのへるどころこそ。おなじ心はいとゞ（孟秋好の夜春え）
ゆかしくかなりさ侮るやうにしてひと
こゝろうちとめはべるけそひはとなつかし
げなれ。とくぞさそ。あはくとゝらずまでお（源のさくにてえ）（老のやさき）
かぞ。たらずしきうくのなぞこゝはさらりのよ（源の詞え）
てぞのかはゆきうるからくの花はみらず。（細六条院給へきんのおもはく）
空の気色につけてもこゝろのうちもと（なのすぐさじべきかし）
たゞりみかれ。春のあはれやし。秋の野
のさかりとどうくしは人めにそひなりね
おぼかろのげやとふまつるなべおはしくは（細古来未決）
なりさこめてそ給しはすれ侍るべらまつるは（のゝすとえ）

細河海ニ云　于季倫金谷弁ニ
楽天が句とひうり　弁曰
奥入ニ　晋石季倫居二金谷一春
花蒲林作二五十里錦障一
河上逢レ春不レ遊楽恐是弁一
心入　楽天河海にみるなるを
幸決わろへるぞ
やまとこの詩には
細同万葉に春はくさ花のひ
もとくに咲ける物の表え
秋ぞまされる。はおふべ
きそえんべし　弁曰
ゆくよりつけて　細　春秋よ
おもひこらされてまさるひつ
ゆうよりけつこうかめんぢの
ふかるべし
えしそ花もりの　孟花鳥
のきとものねとこそいぶ
よりのうつ弟えこそを
でうなり
いづこみかれ大して給へり
らん　細六条院四季に
うちてつべきさんが海
へおりをまそひげ

春の花のはしさしまさくにのみしとひひ
くめかやましくのそれは秋のあはれ
とかさてぞりへゐいづれを時によ
つけてさまにめうつりて、えそも花と（月）
もまのあかとをねくともうさまへ給ふね。
せびさうそねの内ならともそのゆか（源の御ありさとのおそく）
くのくしおつりっ春の色乃まを
とらへまう。秋の草ともかりうれ
てゞうくむかの野辺の虫ともと夜孫
てへば浙しせんせんとも絡むといつ（紫上秋好中宮の心みやうを）
くさよりれんいふを給へかしくまゝえ
まはいうしゆかくゆくさしくゆゆとじむ（秋のこゝろ孟ろすの御心よりとりこそ）

方よもすせあづさたり
とくれ々とさんあく之
三光院右小銃以時小蝶考と
珠らんを毛とうきて當以べ
きなりとらへくらり
すてゝつくりひ
細河男つかきんなどれ
いふ別めつかてさこと
件源氏さ人えよき作りね
との多くが斎夫へおして
とき又の役若の人ぞれ
ふぐめるがさつかされいま
してとき作まいそとけり
中かとゝいやすりとその紫
よいは秋の表としのうち名
をうけくがふとう逢
わやしと見へし　舞此詞
頼藤之いつ出とも巻から記
ことふりと母御息所より
よりせその終へる表よ
西向し八つとそも來て
うくむいおしねども秋
の夕いわやしうかり
こうあうさて給ふし

げまうえそれいつ人ことし給いざらん
をらうそあれいましていくるひつと給
らんげまいつしるきあつすおやしと
きうしゆるべしそらうのうきて給よ
しあのよそすかも（むつましう思ひて）とこまん人られめぐま
もて、恋しけるけまのましひ夕けも、いと（源之）
らうさげるよふえ恋のび給ぞ
（源丞）えうとをさは表をとりくと人恋れど（秋好）
よ恋むう秋のゆうどきの（秋好の詞）ひらき地り
くと給うしりと実て給ゆ、いでの（秋文のうすと孝子）れ
（の恋よろ之）いへつハおんらうえずしゆがしまう
かねぬきうりこのつくよえてあるで（源之細　双作之）

細河文をすのかくれ給人むすり秋かわれだしせのわゆくお事かうり是吾とく
玄妙なり詞勝也
君もさい御さけくい作しげて斉のやりてい稍と申しい秋を表しとひつるよそていれ
御かもらおうすいおかくれをりいさんとえ恋さのいい巴の文とりてうわてらて申すく
いでのれつく　細いでいれつくとし給へさきたん給給へえ之

まくとよんづうき人い
細き実よんづうき人は
かうよわさえうのえ
細かとも出し作しねど
とし表源氏君の祈衆
公の渡きすすと自称
しめすく　孟曰

うきゆめしあつしてもおへくしいまとと
どしひかこしも（源之）恋給つくされだいしらそ（秋文の文）
とゆほいてゐらもこしそうよわがれんと（源之）
きうくえうなしうしたとゆがりくし
てうわげきあへるさ海の、まれかう
なまあうしきうも、（秋文之）んづきあうぞゆがあり
めう、やりつづひきうり給ぬうゑきさ（孟なてつ川の好べく）
まげ、わさまうしうもさしまを給ぬうれ（細源の詞之）
まくしよらうぶうき人いつくてなかしば

つらきんとて　ほつる
うらん人のためハつらく
してつらきハつらき物と
おもせん　師　御方の心ハつる
きんのためハつらくきえん
とゝ源氏をおもくおもて
秋好の御ためをつらかる
んとの御事ハまことによ
んがき人ハつくにそ
わらきるれバハそれよ
まハつくませ給ふなりて
さて又の又抄說アリ
なやうのすなり子くさ給
やさなふくこまりてつる
かうんとての御詞說
云　云此說よろしきや　細
給ふなりね　秋好と見へ引
入給ふとて源も退出有之
柳の枝よ　細　源の心の内具
しられさ角とらへ梅
かをと桜の花よ匂せて
柳か枝よさかせてしかれ
師のりかへ給ふよお返す
ハ朧月夜の事の說あり

すれはよしいまよりふくませのなよう
うらんとてよこらあぬこらかえりうう（孟　源の御ことば也）
いめかひとまちちさえへらうしまうく世ぞ（秋好の御こと也）
さおんへいこうしみじまりてこゝ乃（今御之）
れたとねのとうかいひしぬよめの（孟　云此段通路をうるへる之）
おいそらくしらわけめやあすゞのえぐ
よさうをこられはた給ふすんゆし世
世をあつうあいよよふてゝこゝみを（紫の方之）
いう給ふどいてうあちでかうぬ（秋好の心よく分くる之）
こまつうとろとそうけてちらくへ
さうしそせあて。物語あずとききせ給ふ（細　源の詞）（孟　秋好とせひけるなり）
あれがらこよしゐみさうくるの。

此歌ハくよ心み柳が
とりふなるわり
られハてふげすさ
細　秋好と源の心げ給
ろすわりまじさこしく
ゆそうつしうつてかき
うきハむひきまうわめ
細　秋好よんげ給ふ
と落雲ようむひ今
ことをしらく給よ落
雲ようよひかりしは
秋浅こうきさこし
それどそのいふへえ
年まうき給そてや
まかきこよゆらうう
くうもわづしとこさ
おし給之
うきさのことハ　細　源の年
うけめれが。給さのみち
よハうき叶の様よ近く
のゞうよ思惟ゆきさんま
さりて遂色の心と紫
めづものへうしろやもと
しとし　師　一段よその心之

うぞきけいとをれあずしゐかれ
これいてにえげあきとゝも。ゆそうつき（源の恋慕し給ふ之）
わりきハ。ゆかくまうけめどいふし
へのすきハむひやうそくるすほどのあ（もときぐしきこゆる之）
やまうよ。仏神もゆるしまひもんと（はゞかる之）
ゆりしき御すゞとすみのこちいうし
うやまくふきさのまうかうれ
とゆかしき給。女御ハ秋のあはれ
ともつゞ御。いくへこくもく（源ハ此君を世にもわびしく源の心まかす）
やしくもいらし。はらひかけよ物む（あきれ給之）（けしきなり）
つしうかやまして給さへおもとい
とくまゐりつきてつゐなりと（源氏ハ之）

秋好は源のみ分あれは春也かうきよと云つり。弄 細 孟 始の段之可見之
ぬむつしてもやましげなさ人しあふとりとのくもよりあつかひて 孟 言ふかりも又のや
うよしてあへらしひあつて 師 秋好は源氏の御心とけ給ぬやましく思ひせど。源は
徒因よ忍やめさてりくらし給ふとく
えの春乃かけかの
細 紫上の春とあるれに
まいつの山伯よりえさ
さ 弄日
ゆかやけまうく おかそ
びらりせてやと云ふゆ
へえやけまうへのひまる
さ身わさりつれ源の
ぬゑくし 孟 政乃安膝は
身り似わくそ除す
しそり
うれにあまうぐしらや
細 紫上都よ山ごすりを
とぐこのり作りとく
師 源の御わのあは孤よ悪
のさびしうんとよみが
ぐらしされ名をむけく之

ゆかしがりきこえ給ふ。女御の秋に（紫上に源のゝ給ふ也）
心をよせ給へりしも哀に。君の春のあけ（紫上とさす也）
ぼのに心しめ給へるもことはりにこそあ
れ。時々につけたる木草の花によせて
も。御心とまるばかりのあそびなど（紫上の也）
してしがな。おほやけわたくしのいとなみ（河 不祥）
しげき身こそふさはしからね。いかで思ふ事（隠遁）
して（しかるべくもなきと也）しがなと。たゞ御ためさうざうしく（る）
やと思ふこそ心くるしけれとかたらひき
こえ給ふ。山里の人もいかになどたえずお（細 明石上之事 孟 これより大井の事也）

などかさしもおもふべき
細 明石上の事へうちう給
ひへこゝとさもうしく
也。ほかの有さまをとなさく
源の御わりひあつて 孟 明石
上の心を源の思ひやり給ふ也
ぐゝしく云つゝそ心やそ
うのきまゐは
事へ心やむくおそこえかなる
おすまゐはせじと都より
は心わけなしとく
いとふかゝらん
細 住なるゝまゝの心をとめて
じよ人とまりぬへきこと哀
ふかき所のさまにて
つくらる折ちぎりの
孟 源のまれまれとひ給ふ
ようるてもつらきを
始ちつく

ぼしやれど。ところせさのみまさる御（源の心 細 明石上の事也）
身にて。わたり給ふこともいとかたし。世中（大井へ也）
をあぢきなくうしと思ひしる気色（る）
などかさしもおもふべき。心やすくた
ちいでゝ。おほぞうのすまひはせじと思
へるを。おほけなしとはおぼすものから
いとほしくて。れいのふだんの御念
仏にことづけてわたり給へり。すみ（大井へ也 細 大井の里也）
なるゝまゝにいと心すごげなる所の
さまに。いとふかゝらぬ人にてだにそ（源の心を寂て云也）
ぞろ。哀そひぬべし。ましてみるに（源もさこそ明石の心はおもひしりてと也）
つけてもつらかりける御契の

さずよあさうしぬと也
かよ　細 姫君の出来給
かとらり　孟 姫君乃
お生しまいらせたるよ
わさうぬとさふとく
於大弐までもかく由へ
もりハおさうかぬとお
りかとく
さうくうて
明石の源氏かおゆなり
てものいひてかくさめ
がうてみがれさうとく
をりたどりの
細 八月の事なれど也
鏑矢みぎもおなべし 孟同
うら修居り
細 明石まそのうへ備の
いさら火みやとえぶら
人さしぬめづらしうるよ
それべきと明石上八月にて
よく明石まそてて部は
めづらしふも云給まし
さうへ 孟 大弐の北の方
白き波と浪下明石の浦よ

さすがにあさましくぬそふとはふかく
まそうめくさえもとなれど（源の之）
らへるとゝ海ふしこけゝるやうに（細 うすきあゆ之）（木の葉よ之）
うらやどもこのうけのやりけるのさ
かよえまでつもれりしうらすけれ（源の細之）
よそほしまうしまうはめつらうよ
ゆかしまでのつまふよ
いさらせしうげをすぐれぬうらぎい（明石方 河 廻鴨（イカリ） 日本紀 永食 万）
身のうちなるやさうひとなるもんはりひと
そまぐれ行きてこぞもれば
おさうしぬさうのさひとさうしのゞや（源のあ）
為給ひうらびのうけいさはかうしれうさも（初）

ていさらせりにはよまくてのあつくぞとまうれぬすうしべいやよ路もうよおかへ
さとのあつく
いさりせし　細 此方勝之 古来妹娘の寺之明石そのあひも大弐までのかつし
も同じさよ又嫡母の譲を継のいさら給ふをといひもえくぐさうのえるれ
ぬんをえり寸四ゐことは盛あり
ゆりひてそ　細 減り明石までのいさら末は例さりとも 孟 明石のうしまでのといえ
升までのといひとくいふ義なり
限りくぬ　細 花鳥余情明石上のくいひまふうらも若方の下れといひは云後ぶり
るくぬとも落句而自　花 おくとのといひは云ずれて下よりやうとぞいふかげのさうぐと
いふは火のひらりのさまゞまくぬくぞるべし　孟 此ぐ里火の新とるう方れと
ぞしさはいうずれて下にりやうけるうこゝろさのといひへかうさとぞそるさハ
あさくゆかしめてんのさつぎ給ゆやとよあり
されうさめのと　細 折えしとぞるうあ世の中をそれうさ物としてせそあらん
花鳥余情源氏の君のはくるを明石上の根さうしてえめ中花ハ源のんるうぶし 師説うら
きりのとえうせしぞ明石の上こそ源よううさうすをえしうをあへてくどくへとれ
女のうくくうくをあそうべく根さうふくく
さうときさるすどもよれん
まりうく
孟 娍殿の御堂乃流
念仏し給て後とされ
大弐へおもげくと
よりあふよ明石上を
といまずれさうつや
となり

のどえくしうしともおもふゆ母うさ
めのもつてよゆれさるゝてうあれ
さうとさつくとも体ころとまり
く例よりはひがひがしくふるまひやう

七二之

盃めぐるのとの年をおしは作よ去給ふぞ
らしやひまぎれもんとぞ